

アジアの友

The Asia-no Tomo

10-11

OCTOBER-NOVEMBER

2013

学校法人 ABK 学館
ABK 学館日本語学校設立記念式典
日本語文学のバイリンガル性 (2)





ベトナム



タイ舞踊



ミャンマー舞踊

第12回 ABK 秋祭りを開催

アジア文化会館では、10月26日(土)、今年で12回目を迎える恒例の「ABK 秋祭り」を開催しました。祭りはABK学館日本語学校設立記念式典の後にスタート。式典にご参加の皆様も参加し悪天候の中大勢の方々でにぎわい、留学生たちの各国料理やパフォーマンスをお楽しみいただきました。



台湾



フィリピン



中国



マレーシア



インドネシア



韓国



カンボジア



タイ



OHAGIライブ

アジアの友

2013年10 - 11月号 第505号

目次

巻頭

2 (学) ABK 学館日本語学校設立記念式典

テープカットにあたってのご挨拶 小木曾 友

挨拶と祝辞

- ・ 小木曾 友 (財) アジア学生文化協会理事長
- ・ 佃 吉一 (学) ABK 学館理事長、ABK 学館日本語学校校長
- ・ 杉浦 正健 新屋学寮 OB、元法務大臣
- ・ 佐藤 次郎 (財) 日本語教育振興協会理事長
- ・ スポン チャユサハキット (タイ)
泰日工業大学理事長、泰日経済技術振興協会元会長
- ・ スチャイ ポンパックピアン (タイ)
ABK-AOTS タイ同窓会専務理事
- ・ ウン キム チャイ (マレーシア)
マレーシア ABK 同窓生募金発起人代表
- ・ ベー チョー キム (マレーシア) 元 ABK 在館生代表
- ・ チャン クオック ホーアン (ベトナム) ABK 在館生代表

評論

26 日本語文学のバイリンガル性 郭南燕

報告

32 日中青年交流センタープロジェクト
第3回年次総会に出席して 小木曾 友

コラム

38 泰日工業大学 奮闘記 (第2回) 峯田真由美

知友会通信

40 イベント情報

MEMBERS

ご入会、ご寄付のご報告 (2013年8月、9月)

— <お知らせ> —

読者からの御希望に
応え、今月号より、
本誌表紙に目次ペー
ジ同様、当協会の創
設者・穂積五一氏の
揮毫による題字を使
用いたします。

<表紙> 第12回秋祭りで料理を作るマレーシアBチーム

(学)ABK学館日本

2013年10月26日(土)、来年4月に開校されるABK学館日本語学校の設立記念
いにくのお天気でしたが、大勢の関係者の皆様に足をお運びいただき、無事開催されま

テープカットにあたってのご挨拶

小木曾友(財)アジア学生文化協会理事長

本日のテープカット式は、学校法人ABK学館日本語学校の新校舎竣工披露、及びABK同窓生募金に寄付をお寄せ下さった1,020件の個人・団体のお名前を記載した銘板の除幕を記念して行うものです。日本語学校の設立に要した全経費は約3億5千万円でしたが、このうち、寄付金約1億2千5百万円をお寄せ下さった方々の代表をテープカッターとして、ここに立っていただくことをお願いいたしました。

寄付金は、同窓生募金約5800万円、篤志家お二人からの約6700万円です。篤志家のお二人は、故溝上泰子様と故杉浦ゆき様です。

溝上様は元島根大学教授で人類の中にある差別の解消と女性の地位向上のために一生をささげられた方、杉浦様は、今日ここにご参列下さっている杉浦正健様のご母堂で、アジア留学生のための奨学基金にとご寄付を下さっていたものです。お二人のことは、2階の展示室に詳しい資料が展示してありますので、式典終了後、ゆっくりと見学していただきたいと存じますが、お二人のご高志に対する感謝の気持ちを表し末永く記念させていただくために、二つの教室を「溝上泰子記念教室」「杉浦ゆき記念教室」と命名させていただきました。併せてご覧いただければ幸いです。

今日は、お二人にゆかりの杉浦正健様と松本昌次様、および、台風の近づくなか、海外から駆けつけて下さったタイ、マレーシア、台湾の同窓生代表の方々にテープカッターとなっていただきます。どうぞよろしく願いたします。



日本語学校玄関に取り付けられた
ABK同窓生募金寄付者銘板

語学校設立記念式典

式典が開催されました。台風27号の東日本接近が予報され、朝から雨が降りしきるあした。



▲テーブルカッターの皆様(左から) Mr.Foo Siang Seng, Mr.Tang Kok Lian, Mr.Ng Kim Chai, Mr. Beh Chor Kim, 松本昌次様, 佃吉一, 小木曾友, 杉浦正健様, Mr. Supong Chayutsahakij, Mr.Boonsak Charoenkoop, Mr. Bandhit Rojarayanont, Mr.Suchai Pongpakpien



清上素子記念教室
Mizuno Yukiko Memorial Room

杉浦ゆき記念教室
Sugihara Yukie Memorial Room



式典参加者に配られた記念タオル

学校法人ABK学館日本語学校設立記念式典 挨拶と祝辞

ご挨拶

小木曾 友 財団法人アジア学生文化協会 理事長

財団法人アジア学生文化協会を代表し、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、台風の近づくさなか、海外からはるばるこの式典に駆けつけて下さったアジア文化会館（ABK）の同窓生の皆様、また、お足元の悪い中をご参列下さった内外のご来賓の皆様、さらに、関連団体、友好団体、大学・専門学校・日本語学校等の関係者の皆様、そして、長年にわたり惜しみない支援を下さってきた協会の役員・評議員・会員・元職員、そして厳しい条件のもとで日夜奮闘をつづけている教職員の皆様、本日も列席の全ての皆様に心から御礼申し上げます。

さて、私は、6年前の2007年10月に催された弊協会創立50年記念式典において、協会の長期計画として次の3つの課題を掲げました。

- ・日本語教育部門の学校法人化
- ・アジア文化会館（ABK）の建て替え
- ・同窓生と提携した新規交流事業

これらの課題は一体化としてとらえ、早期に実現をはかるべく全力を投入することを表明いたしました。

それから6年、本年2013年にこれら3つの課題は、文字通り一体化して、ほぼ実現



することができました。創立以来、弊協会の2つのメイン事業、一留学生宿舍と日本語学校一の拠点として主要な役割を果たしてきたABKは、50年の風雪を経て老朽化し、一刻も早い建て替えが迫られていました。しかし、留学生宿舍については、近年、各大学が、設備がよく部屋代の安い学生寮を競って建設した結果、ABKのような民間団体がつくる宿舍は経営が成り立つ見込みが立たず、再建の計画は早い段階で消滅いたしました。代わって、1983年の「留学生10万人計画」に後押しされた日本語教育

部門が、定員400名の学校に成長し経営も軌道に乗ってきたため、まず、日本語学校を耐震構造の校舎に新築することによってABKの建て替えの第一歩とすることといたしました。と同時に、従来からの念願であった日本語学校の学校法人化の実現をこの際目指すことといたしました。

この計画は、具体的には2009年頃から開始されましたが、その時、理事会において二つのことが確認されました。一つは、新しい建物は、ABKの現在地(文京区本駒込2丁目12番地)に建設すること。これは、かつてABKの留学生・研修生であった役員・評議員から、『留学生・研修生・日本人の先輩たちの思い出はすべてこの地にある、心の故郷であるから、たとえ規模が小さくなくてもよいから必ず、この地に建設すること。全部売却して他の土地に移るなどということは夢々考えないこと。万一そのようなことがあった場合は、今後一切の協力をしない』と強く念を押されました。私たちの苦悩はこの時からはじまったのです。

もう一つは、校舎建設費など学校法人化の費用の一部は、ABK(宿舍・日本語コース)の同窓生たちから寄付を募りまかなうこと。これは、この学校の先輩たちの寄付によって建設されたという事実を残し、穂積五一

学校法人 ABK 学館日本語学校設立記念式典

式次第

11:00 開会

ご挨拶

- 財団法人アジア学生文化協会理事 小木曾 友
- 学校法人 ABK 学館理事長 佃 吉一

来賓ご挨拶

- 元法務大臣 杉浦正健様
- 財団法人日本語教育振興協会理事長 佐藤次郎様

海外からの来賓ご紹介 (11名)

来賓ご挨拶

- 泰日工業大学理事長兼、タイ国泰日経済技術振興協会名誉会長
Supong Chayutahakij 様 (バンコク高速道路株式会社副会長)
- Secretary General, ABK-AOTS Alumni Association (Thailand) ,
Suchai Pongpakpien 様
- マレーシア ABK 同窓生募金発起人代表
Ng Kim Chai 様 (Director, Invendo Sdn. Bhd)
- ABK 元在館生代表
Beh Chor Khim 様 (マレーシア、病院経営・院長)
- ABK 在館生代表
Tran Quoc Hoan 様 (ベトナム、東京大学工学部電子情報工学科4年)

12:45 閉会

先生によって創設され、ここに学び学んだ先輩たちが育んだ ABK の精神と伝統を後輩たちに具体的に伝えることを目的としたものであります。

計画の当初は定員400人の日本語学校を一挙に学校法人化する計画を立てましたが、2011年3月11日の東日本大震災と福島原発事故をきっかけとして、留学生の入学数大幅に減少する見込みとなったため、計画の規模を半減し、まず、160名の学校を ABK の横の敷地に建設することに變更いたしました。そして、東京都への申請を行い、約2年間(準備段階を含む)にわたる厳し



い審査を経て、今年7月、学校法人 ABK 学館日本語学校の認可を得ることができたものであります。

一方、ABK 同窓生募金（1口1万円、目標額5000万円）は、2010年6月、同窓生〔ABKと兄弟寮に居住したことのある各国（在日を含む）留学生・技術研修生・日本人学生のOB/OG、ABK日本語コースの卒業生、知友会（協会が身元保証人を引き受けた留学生の会）の元留学生、及びASCAの役員、会員、職員等、並びに本募金趣旨に賛同されるすべての方々〕への呼びかけを開始しました。長引く経済不況、東日本大震災・原発事故、円高、欧州経済危機、タイ国の大洪水などの逆風に阻まれ、当初はなかなか寄付額が増えませんでした。私たちの懸命な訴えが同窓生たちの心を動かし始め、1年後の2011年11月頃から、一灯やがて万灯となるごとく、次第に寄付者数と寄付金額が増え始めました。その原動力となったのは、まずタイの同窓生たち—ABK-AOTS Dosokai Thailand、TPA、TNI—が2011年10月に“One Night for ABK” in Thailand（ABKの一夜 in タイランド）を募金のため

に企画しましたが、大洪水で2回延期となり、2012年3月に開催の運びとなり、高額の寄付を集めて下さいました。また、マレーシアの同窓生たちは、当初連絡のついた人々は数十名でしたが、お互いの呼びかけによって次第にネットワークの輪がひろがり、最後には寄付者の数は300人を超えるまでにになりました。その他、中国、ベトナム、インド、ブラジル、日本など、同窓生が募金に参加した地域は、全世界23の国・地域に及び、募金を終了した2013年7月31日までに、募金総額58,392,125円、寄付者総数1,020件（個人及び団体）を達成することができました。寄付者のお名前は銘板に記載し、新築のABK学館日本語学校の玄関の壁に掲示して感謝の意を表し、末永く保存させていただくことといたしました。（この式典終了後、自由に見学していただけます。）

この募金運動を通じて、改めて結束を強めた各国同窓生たちのネットワークは、新しい歴史の第一歩を踏み出したABKのこれからの活動を進めていく上で、バックアップの大きな力になっていただけるものと信じております。



さて、ここで少し話題を変え、最近の朝日(2013.10.22)、読売(2013.10.24)両紙に報じられた「北京大学など中国5大学に中日学生の共同生活寮の設置」という話題をご紹介します。これは、1957年に来日、東京大学で学びABKの第1期生であった香港の曹其鏞(Ronald Chao Kee Young)さんが、最近の悪化している中日関係を心配して、中国の主要5大学に、中国人学生が日本人留学生と共同で暮らす学生寮を建設する費用として、各2千万元ずつ計1億元(約16億円)を寄付して始まったものです。曹さんは、ABKでの経験から「学生時代の出会いは一生の宝になる。中日関係の未来を若者に託したい」との想いを持ち、そのために私財を提供することを決心されました。北京大学では、既に昨年9月から共同生活が始まっており、清華大、復旦大、上海交通大、浙江大でも来年から順次オープンする予定になっているとのこと。

私はこの10月13日～15日、5大学の関係者が開いたシンポジウムに出席した際、北京大学の中日青年交流センターを見学しましたが、寮生たちの明るく晴れやかな笑

顔が印象的で、共同生活がうまくいっているな、という印象を強く持ちました。成果が出るのは30年先、50年先ですが、「中国のリーダーにはこの5大学出身が多い。若いうちに信頼関係を築くことが国どうしの人脈になる。人脈があれば対立も克服できる。中日の若者の理解が深まって、我々が失うものは何一つない」という曹其鏞さんの言葉を深く味わう必要があると感じます。

6年前にお約束した3つの長期事業は、曲がりなりにも一体化して実現することが出来ました。しかし、まだほんの第一歩を踏み出したにすぎません。新しいABKがこれからどのような歴史を刻んでいくか。それはまず協会を担う私たち教職員のきびしい精進と切磋琢磨が要求されますが、本日ここにご参集くださった皆様をはじめ、広く内外関係者のご支援が不可欠であることは言をまちません。どうかこれからも一層のご指導・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

これもちましたて、私の御挨拶とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

ご挨拶**佃 吉一** 学校法人 ABK 学館理事長、ABK 学館日本語学校校長

足元の悪い今日、このようなささやかな手作りの ABK 学館設立記念式典においていただきありがとうございます。特に海外からも出席いただくなど、本当にありがとうございます。今は恐れていました台風もぎりぎり避けてくれたようで、ほっとしております。

私は ABK 学館の理事長の拝命をいただきました佃吉一と申します。ABK 学館を代表して、ごあいさつ申し上げます

今日は、1983年に日本語コースを開設して30年を経て、ようやく、念願の学校法人として、出発する記念式典を開催することができました。

協会設立以来、多くの関係者のみなさま、とりわけ、アジア地域の元日本留学生、研修生からの協力、そして多額の寄付金を頂き、その基金をもとに学校法人の設立ができましたことをご報告するとともに、感謝申し上げます。

まず、初めに、学校法人 ABK 学館日本語学校設立の経緯についてご報告します。

1) ABK 学館は母体であります財団法人アジア学生文化協会 (ABK) が2013年7月まで公益法人に移行申請をするためには、新校舎を確保し、学校法人を設立しなければ、学校法人ができないという条件があるなかでスタートしました。しかし、ご存じのように2011年の3.11の東日本大震災、原発事故という非常に厳しい痛手を受け、計画を



大幅に縮小変更してのスタートとなりました。その後、東アジアの緊張関係、留学生の大学直入等の変化も加わり、日本語学校留學生が激減し、特に ABK の学生は400人いた学生が200人に激減するという状況下での ABK 学館の船出となり、学生募集に苦戦しているという状況です。

2) 2つの日本語学校の運営でスタートします。具体的には、ABK 学館の規模、移行への法的問題もあり①大学学部進学希望者は財団法人アジア学生文化協会日本語コース、②大学院、専門学校の進学、文化体験等の希望者は ABK 学館で学習することとし、2つの学校で事業の展開を行い、連携して近い将来、学校法人 ABK 学館に

統合するという2段階で計画を実行することとし、職員も10人に満たない小さな規模で一步を踏み出すことになりました。

3) 次にアジアは新しいステージが始まるということです。このように非常に厳しい環境の下でのスタートではありますが、アジア地域は今まで以上にさらにダイナミックに動いております。東アジアから東南アジアに、そして、南アジア地域までそのダイナミズムが及びつつあります。その象徴が2015年にスタートしますアセアン経済共同体です。人、物の流れがダイナミックに変化するなど様々な面でアジア地域の社会構造が変化しつつあります。新しいアジアの時代の幕開けを迎えつつあると認識しています。

従って、留学生受入も新しいステージに入り、アジア地域内でも競争時代になり、日本語学校ではその影響はもっと激しく、ABK学館はこの大変化の中での船出となりました。

次に、この様な状況の中でABK学館の目指す日本語学校について、5つの目標をお話します。

(1) 伝統を継承します

ABKの50年以上にわたる留学生、研修生の受入・支援の伝統を受け継ぎつつ、新しい時代に対応するため、学校法人を設立し、組織基盤を堅固にしてさらなるアジアの人材育成事業を行ないます。寮の伝統を受け継ぎ、日本語教育と寮生活の一体化した事業の継続を進めてまいります。

(2) 2部制の特徴を生かした留学生受入を

拡充します

2部制の導入で、留学生の自主性を尊重しつつ、今まで全日制では受入困難であった学費・生活費確保に厳しい学生でかつ優れた学生の受入拡大を図る。そのためには、日本留学をサポート、アルバイト、宿舍支援も含む勉学環境支援体制も強化し、より多くの地域からの学生受け入れに取り組みます。

(3) 新時代の要請にこたえる日本語教育を実施します

海外の大学での日本語学習者は急激に増加し、卒業後に日系企業等への就職を希望する学生も多くなりつつあります。また、国際化を目指す日本社会・企業もアジアの高度人材を求める時代に入りました。日本語学習とともに実践的体験、日本社会・文化の理解、より高度な日本語学習を希望して留学する層、日本語をベースとしたキャリアアップを図りたい留学生のニーズに積極的に取り組みます。

(4) ABK学館でアジアの大学生が交流する場を作ります

日本語教育を通じて、アジアの大学生、日本の大学生が交流し、友達作りができる





場として ABK 学館を位置づけ、アジアの大学生が ABK 学館で日本語の学習する企画、機会の拡充に取り組みます。

(5) 国内外の大学・企業等との連携を推進します

留学生受入に積極的に取り組みつつある国内の大学、および泰日経済技術振興協会附属日本語学校、泰日工業大学、ドンズー日本語学校をはじめとする日本留学に関心の高い海外の大学および学校と連携し、アジアからの留学生受入の促進を図る。同時に、従来の取り組みがすくなかった企業等の連携についても、積極的に取り組むとともに、アジア地域に広がった ABK ネットワークを強固にし、新しい時代の人材育成を図ります。

ABK 学館は今後、アジア全域、日本とアジアの関係、そして日本の社会も変化し、日本の留学生受入制度も大きく変化する中で、ABK 学館日本語学校は日本語教育を基本としてアジアの人材育成に取り組みます。

その取り組みにあたり、学校法人 ABK 学館は財団法人アジア学生文化協会と連携して、残された課題の① ABK 学館への日本語事業の統合と設備の充実、② ABK 学館の増築とアジア文化会館等の建て替等に取り組みつつ、さらなる発展を図ります。

以上、ABK 学館の発展を目指して、アジアの人々の声を聞き、穂積スピリットを忘れず、

しなやかに、そして強く邁進していきたいと決意している次第です。

最後に、2014年4月に学校法人 ABK 学館日本語学校の開校となりますが、同時に財団法人アジア学生文化協会も新公益法人に移行します。ABK 学館設立にあたり、多大な協力をいただいた方々のお気持ちと穂積先生の精神を大切に、ABK 関係団体・個人及び政府・自治体・民間関係団体の連携・協力をいただきながら、新時代に対応し、発展に尽力いたします。今後とも、一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。また、このようなささやかな ABK 学館設立記念式典に足元が悪い中、お出で頂きましたこと重ねてお礼申し上げます。

これで私の挨拶とさせていただきます。

なお、式典を開催にあたり、アジア文化会館で行っております学生による秋祭りをこの後開催しますので、学生が作りました、料理、イベントを楽しんでいただき、学生との交流を図っていただければ、幸いです。

祝辞

杉浦正健様 新星学寮 OB、元法務大臣

ご紹介いただきました杉浦正健でございます。今日は新しい学校法人が設立し、皆様方のおかげで立派な学校ができて、そのテープカットをするからぜひ会いに来いと小木曾さんに言われまして、参ったわけでございます。

今を去る60年ほど前、この会館本体のテープカットがありまして、私は Cutter ではありませんでしたが、事務方をした人間でございますので、万感の思いでございました。この場所は私にとっても忘れ難い場所です。穂積五一先生御夫妻に仲人をお願いしまして、ここで結婚式をやったんですね。在館生100人くらいいましたか、全員出てくれましたし、ロビーの上まで使ってやらせていただきました。時たましか参りませんが、来るたびにそういうことを思い出すわけでございます。

先程寄付者の方の銘板を玄関の所で拝見しましたが、細かい字で数えきれないくらい多くの方のお名前がございました。小木曾さんからうかがったら、タイ、マレーシア等々、海外から1,000人を超える方のご協力をいただいたということで、穂積先生も喜んでいらっしゃるんじゃないかなと、あの銘板を見ながらつくづく思った次第でございます。また、私の母親の杉浦ゆきの奨学基金として ABK に以前寄付いたしました「杉浦ゆき奨学基金」を、この度の日本語学校の建設費用の一部に当てていただ



き、「杉浦ゆき記念教室」を作っていただくことができ亡き母も大変喜んでいることと思います。

この会館や新星学寮とご縁のあった方が全世界のあちこちで活躍しておられます。小木曾さんから曹其鏞（そう・きよう）さんの話が出ましたが、曹さんは第一回の在館生でした。私と小木曾さんは最初から住み込んでいて、私は501号室で小木曾さんは401号室でしたか。401、501はそれぞれ日本人学生4人の部屋なんですね。そのフロアはみんな留学生の方でしたが、401、501というのは溜まり場で、みんなが集まって来て、最初は禁酒だったのですが飲まないわけにはいかないというので、穂積先生



の目を盗んで酒を飲み始めた。それで、友好の実をあげたことを思い出しますが、まあ寝ても覚めてもみんなと一緒に、非常に、私も若かったですけど、楽しい思い出でございます。

曹さんは知る人ぞ知る、ですが、あの方は2代目かと思いますが、香港で5本の指に入る財閥の御曹司です。御曹司ですが苦勞されまして、今立派な経済人になっているわけです。その曹さんにとって16億円というのはたいした金ではないと思うのですが、しかしそれだけの金を投じて、しかも共産党トップに根回しをされて、土地は各大学の無償提供で、建物を建てる費用をご寄付するということが学生寮の運営を始めたというのは本当に素晴らしいことでございます。私も何回かお目にかかっていますが、本当に立派な仕事だと思います。日中の将来にとって、これは100年、200年後を考えたら、孫文とか周恩来が日本で学んだように、日本の若者がそういった中国の立派な大学で学んで中国人と共同生活をして、新星学寮みたいです（笑）、育って行くという将来を想像すると本当にありが

たい。これも彼がこのアジア文化会館に住んで、我々と一緒に付き合ったということから来ているのだと思います。

スポンさんがタイのほうからいらして今ここにおいでになります。タイのTPA〔Technology Promotion Association (Thailand-Japan); 泰日経済技術振興協会〕に至っては、ABKを遥かに凌ぐ事業に発展しました。大事業ですね。30年くらい前にお伺いした時は最初の会館が建った頃で、日本語学校をやられたりしていましたが、今や7階建ての本部建物があり、いろんな事業、出版までやられていますね。お金を稼いでいらっしやる。とうとう大学までつくってしまいました。泰日工業大学〔TNI: Thai-Nichi Institute of Technology〕という大学で、穂積先生とタイのソンマイさんの等身大の銅像が校庭の真ん中でできております。日本にはまだ穂積先生の銅像はありませんが、タイにはもうあります。それはタイの方々がおつくりになった。安倍晋三さんが大学開学当時、総理でしたから、安倍さんのあまり上手とはいえない『泰日工業大学』の文字が輝いておりますけど（笑）。また、総理は本を寄付されましたね。『安倍文庫』というのでしょうか。

各国での同窓生の活動は盛んで、マレーシア、インドネシアもタイ同様古いのですが、今度はミャンマーでも始まります。その中で、タイの方々の長年にわたるご努力、これはもう本当に素晴らしいので、このあいだ、『国際交流基金賞』を受賞したそうですが、あれでは小さすぎます。文化勲章くらいあ

げないといけないと思うほどであります。

タイの方々の事業を学んで、今度はミャンマーの人たちがものづくり大学を立ち上げようとしていますし、これから10年後、20年後、100年後、アジアの協力、曹さんの事業もそうですが、この会館でご縁のあった方々が、先導してやっていただけるのではないかと期待しておる次第でございます。

小木曾さんが以前からアジア文化会館を建替えたいと言っていて、ずいぶんご努力されてやっとここまで来たわけですが、だいぶ痩せまして、佃さんもこれから大変ですけど、今年学校が出来た。これがアジア文化会館の新しい時代に向かっての出発点になると思いますし、教職員の方々は苦勞されていますが、必ず実って行くと思います。

佐藤先生にうかがいましたが、今日本語学校は日本全体で400あるそうです。3万人日本に来て勉強している。競争も激しいですね。宿舎に至っては、これはいいことですが、各大学が少子高齢化だから、留学生を入れて定員を満たそうというわけで、いい宿舎をあちこちに作っています。地方のなんでこんな所に留学生寮があるかと思うようなところにも出来ています。実際、金儲けのために作っている所もあるわけですが、そういう寮は寮として、ABKは僕等が新星学寮でやってきたように穂積先生のご意思を汲んで、留学生と日本人学生が共同生活をする、そこで全人格的に触れ合うという場を、ぜひここに残して欲しいと思います。10部屋でも20部屋でもいいんで

す。曹さんに少しお金をだしてもらったらどうでしょう？ ちょっと恥ずかしいですかね（笑）。それを元にして各種交流事業、技術協力でもあるいは専門的な教育でも行えばいいわけです。あの麻布にある国際文化会館のように、あそこは宿舎もありますし、会議室もありますし、ああいうタイプのアジア文化交流の拠点になればと思います。

あんまりでかいこと言って「おまえやれ」と言われると困るんですが、齢80になりまして、あの世が近いものですから言わせていただきます。私の娘がABKの理事を仰せつかっているそうですが、ぜひ協会にはそういう方向で努力していただきたいと思っています。

原点である新星学寮、あそこでの共同生活…、当番で飯を作った、全員で掃除をした、そこへ留学生を迎え入れた。それが出発点でABKが出来、今日に至っています。その原点を小木曾さん、佃さんが率いるこの会館の方々には忘れないように、今後の事業発展を目指して行っていただきたいと心から願っている次第でございます。重ねまして、日本語学校の開設発足、心からお祝い申し上げ、ご努力いただいたご来賓の方々、協会OB、現職、関係者、本当に風雪に耐えて安い給料もちゃんともらっているかわかりませんが、本当にご努力いただいている皆様方に敬意を表し、協会のこれからのますますのご発展をご祈念申し上げまして、言い尽せませんが、ご挨拶とさせていただきます。今日は本当におめでとうございました。

祝辞**佐藤 次郎 様** 財団法人 日本語教育振興協会 理事長

ただいまご紹介にいただきました財団法人日本語教育振興協会の理事長をしております佐藤と申します。一言お祝いの言葉を申し上げます。

今日は、学校法人 ABK 学館日本語学校が設立の運びとなり、来年の4月から学生を受入れることになりましたこと、アジア学生文化協会の皆様をはじめ、文化会館で学びまた日本語コースを卒業された皆様方の長い懸案であり念願であった学校法人化が実現したこと、そして日本語学校の新しい校舎が完成したことに対しまして心からお祝いを申し上げます。誠におめでとございました。

私は先ほど小木曾理事長、佃理事長、それから杉浦先生のお話により、アジア学生文化協会の事業、寮の運営、学校の経営、そしてそこで学んだアジアを中心とした各国の留学生の皆様方が活躍をされている状況をお聞きし、またその留学生の皆様がこの新しい校舎をつくるにあたって、短期間に多額の寄付を集められ、この場所に再び新しい立派な校舎ができたというお話を聞いて、感動いたしました。これこそ日本語学校のあるべき姿かなとつくづく思った所でございます。同窓生の留学生の皆様方にも、またこの協会の関係の皆様方にも長い間の念願が達成できたということでございますが、この間大変なご苦労があったかと思えます。



小木曾理事長とは時々お会いするんですが、お話を聞くと、この問題で頭がいっぱいのご様子でした。学校を一つ残しながら新しい学校をつくるというのは、役所の手続きが非常に大変であったと思います。普通だとそういったことは認められないということになるわけですが、小木曾理事長が非常に熱心に関係の責任者にお話をし、いろんな難しい問題を一つ一つ解決されていったのではないかと私は推測をしております。いずれにしても、皆様方のご労苦に対し、心から敬意を表したいと思えます。

先ほど佃理事長から新しい学校の運営についていろいろお話がございました。私も

全国の日本語学校の協会の責任者をしておりますが、現在約400の日本語学校が協会に加盟しております。学生は約3万人。協会設立後二十数年経ちました。この間大変苦勞をして今日を迎えております。そこで現在の課題をいくつかご参考までにご紹介させていただきます。

先ほども話が出ていましたように、東日本大震災があり、福島原発事故も発生し、また中国・韓国とは2国間問題がいまだ解決されていないという事情もあって、日本語教育機関の学生数はこれらの影響を受けて減少しており、日本語学校の関係者は学生の募集に大変苦勞しています。中国・韓国からの学生の最近の状況を震災前と比較すると、韓国は30%程度、中国は70%程度という状況でございます。ABKも大変苦勞されていると思います。一方でそういう状況ですので、各日本語学校はいろいろな国に出かけて募集しています。そして、アジアの各国からは徐々に日本への留学生が増えております。特にベトナムとネパールは非常に大幅な伸びをしています。ベトナムが一番大きな伸びをしまして、この1年間にベトナム人学生は、10月入学者を含めて1万人をこえることになっております。昨年は1年間に3,000人くらいでしたから、3倍以上です。ネパールが約4,000名で昨年の2倍です。

中国、韓国、台湾はかなり

減少しており、回復もまだ見込めない状況で、新しい国から学生が多くきている。今までの経験から言いますと、現地の経済状況等を考えると、学生が短期間で急増する場合は、いろいろ問題も抱えている場合があります。私どもは学力があり、意欲のあるしっかりした人を迎え入れたいと考えております。また日本で学業の目的を達成するためには、一定のお金は必要になるわけですから、そういった経済的な支弁能力といったことを良く点検をして、受入れをこれからもして参りたいと思っております。

いずれにしても、日本語学校が受入れている国の地図が大きく変わってきている。今までは中国、韓国、台湾の学生で、だいたい8割か9割を占めていた。ところが現在は中国、その次にベトナム、そしてネパールときて、韓国、台湾と続きます。こういう大きな変化が起きています。2年後には、高等教育機関の大学とか専門学校にもこの傾向が及ぶ、大きな影響がでてくるということです。





学準備のための日本語教育を中心にやって参りました。これからはそういうことだけではなくて、日本の企業に就職をしたい、大学へ行って大学を出て日本の企業に就職したい。あるいは母国で大学を出て企業に就職をして、日本で日本語を勉強して日本文化や企業文化も身につけて企業で働くという人も今は出ていま

現在、日本語学校の卒業生の74%は日本の大学・大学院・専門学校等に進学しています。中国、台湾、韓国からの学生は大卒の方が多く、中国の場合は現在日本語学校に来る学生の4割以上が大学を卒業しています。現在は以前と違って、日本語学校に来る学生達も高学歴化しています。そして、問題をおこす学生は現在は、大学や専門学校よりも少なくなりました。そういう状況になっています。

ただ、今までは日本に来て大学に進学することが多かったのですが、それぞれの国で大学がかなり多くできていて、収容能力も増えています。そういう意味で、最近では大学院を希望する人がかなり増えています。それぞれの分野でいろいろ変化が出てきているということです。その点を十分に考えて日本語学校を運営する必要があるのではないかと思います。

その意味で申しますと、日本語学校では今まで、ABKの学校もそうなのですが、大

す。日本の大学等に進学するだけでなく、日本の企業に就職したいという人たちも、増えつつあるわけです。

そこで、その人たちのために日本語だけでなく、日本文化、日本の習慣を身に付ける、日本の社会のことも勉強してもらおう。そういった人は企業でも十分に活躍できることになろうかと思います。そういう意味で、ビジネスのための日本語教育というのを私の協会でも既に開発をして、日本語学校が十分に力を発揮できるように支援して行きたいと思っております。

その他、日本の社会では外国人の人たちが地域で日本語を勉強しています。また、研修生の日本語教育もあります。最近では介護士、看護師の日本語教育の問題もあります。日本語教育はいろいろな分野で必要になっています。これからますます需要が高まっていきます。そういう意味で、私はこの日本語学校がさらに体制を強化して、優れた先生方が安心してお仕事をさせていただ

けるような、そういう基盤を強化していく必要があるのではないかと考えています。

今日ご参列の皆様方にご支援をいただき、また、国の政策としても、やはり日本語、あるいは日本文化というものを外国の方々に教えて行く、普及して行くということが、国益とも関係が深いということを認識して応援をいただきたいなと思っております。

最近外務省でも海外日本語教育の普及促進のための懇談会が設けられ検討がされています。私もその懇談会のメンバーになっていろんな議論をしています。海外で日本語学習をしている人数がつい最近発表されたのですが、2013年の調査では398万人、約400万人が海外で日本語を学んでいます。前回の3年前より33万人増えています。アジアでいうと、タイとかマレーシア、インドネシア、そういう国が増えている。それは中等教育レベルで日本語を勉強したいという人が増えています。ただ、それぞれの中等教育で教える先生がいない。十分なネイティブの先生が補充できない。私は政府だけでやるのはなかなか大変だから民間の日本語学校はじめ民間の力を借りて政府と一緒に頑張って応援をしたらどうかと、そのためのシステムを国が作って一緒にできないかということをご提案しております。

若い時日本語を勉強し、日本文化に関心を持つと、日本にも行ってみたいという気持ちが出てきます。そういった若者を短期間でいいから受入れてあげるといったことが必要ではないかと思えます。

私は日本語学校の協会のほかに、

ASEANの元留学生の団体である各国の帰国留学生会がASEANの10か国にありますが、その連合組織であるアスコジャ(ASCOJA)という組織の役員の人たちとアスジャ・インターナショナルという組織を通じてアセアンの留学生のお世話とASCOJAとの連携の仕事を10年以上させていただいております。そこでアジアの元留学生のみなさんともお会いする機会があります。今日はタイのスポンさんもおられますけれど、今年も9月に、ハノイで総会がございました。その総会などに出ると、ここのABKの出身の方々がたくさんおられます。そして、非常に活躍をしています。そういうことを先ほど関係者の話を聞いて思い出しました。

また、中国の有力大学で寮をつくられた香港の曹さんのお話も聞いて感心をいたしました。ABKは、私の考えていることを実際に日本語学校で実現させている学校です。リーダーシップをとってやっている学校です。新しい校舎ができて学校法人化されましたが、これを契機にさらに伝統を引き継いで、その上、新しい時代に沿った日本語教育を工夫していただき、理事長、校長を中心に優秀な教職員の方々のご尽力をいただき、更なる発展を遂げていただきたいと思っております。

私は、今日はお祝いに参りました。そして将来を期待して皆様方のご支援を引き続きお願いしたいと思います。以上で私のお祝いの言葉を終わらせていただきたいと思います。おめでとうございます。

祝辞

スポン・チャユサハキット 様 (タイ)

泰日工業大学 (TNI) 理事長、泰日経済技術振興協会 (TPA) 元会長

私と ABK との関係は今から 50 年以上前に遡ります。私は 1961 年 (昭和 36 年) に文部省奨学金を受け日本に留学しました。その年の夏、強い日差しの中初めてアジア文化会館を訪れました。

その時に、ABK に何か他のところとは違うユニークな温かい雰囲気を感じたことを今でもはっきりと覚えております。1963 年に私が東京大学に編入した時は入館を申し込んだものの定員の関係で入館できず、修士課程で勉強していた 1966 年にやっと念願が叶い入館することができました。その後の約 2 年間でここで過ごしましたが、この間に穂積先生や田井さんや小木曾さんからその後の私の心の大きな柱となる様々なことを学んだのです。

私がタイへ帰国した当時は、今では考えられないかもしれませんが、タイでも反日運動が盛んに行われていました。そのような中でも私は日本で共に学んだ日本の友人やタイの仲間たちと共に、両国の友好とタイの発展のために自分たちが頑張らなければ



ばならないと考えていました。この件について穂積先生にも大いに相談しました。それを実現するために 1973 年に泰日経済技術振興協会 (TPA) を設立したのです。設立以来、TPA はタイの産業発展と人材育成、そして両国の友好に大きく貢献してきたと自負しております。また 2007 年には TPA 設立当初からの夢であった泰日工業大学 (TNI) を開学しました。TNI は本年 3 期生を輩出し、日本のものづくりを理解した卒業生たちはタイの産業界の次世代を担う中核人材として活躍し始めています。

今、TNI の中庭には TPA を創設した穂積先生とソムマーイ先生の銅像があります。これはタイと日本の真の友好発展を願う創



設者を称えて建立されたものです。タイに
来た時には是非このタイ日友好の象徴とも
言える銅像を見に来てください。

TPA が40周年を迎えたこの年に、我々
の生みの親であるアジア学生文化協会が

ABK 学館日本語学校を設立されましたこ
とは誠に感に堪えません。これから貴学が
益々発展されることを祈念してお祝いの挨拶
とさせていただきます。ありがとうございます。



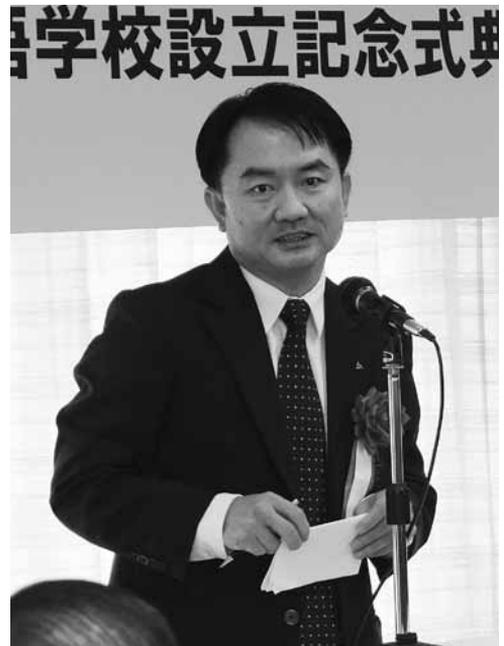
祝辞

スチャイ・ポンパックピアン 様 (タイ)

ABK-AOTS タイ同窓会 専務理事

Good afternoon, my name is Suchai Pongpakpien, Secretary General of ABK & AOTS Alumni Association (Thailand). First of all, as a representative of the ABK & AOTS Alumni Association (Thailand), I would like to say "Congratulations" for the foundation of the ABK COLLEGE and the completion of the new building to the ABK COLLEGE Japanese Language School.

Our Association is 47 years old in this year since its establishment. It was very long history on good relation with ABK. In the occasion of the 44th anniversary of our Association, we planned to hold a event of "One Night at Asia Bunka Kaikan" in Bangkok on Oct. 2011, getting together to pay respect to Hozumi-sensei and to do a fund raising for the new school building of ABK Japanese Language School. But as you know, we had a very big flood in Thailand in 2011. So at first we thought that it is very hard for us to



achieve the target of the donation, but we could finally hold the event at the end of March of 2012 and had been done it very successfully.

Additionally, our Association is only one Association which still has the name of ABK among the related organization

in Thailand. Two years ago, we had been faced a big issue which AOTS (The Association for Overseas Technical Scholarship) changed the name and became HIDA (The Overseas Human Resources and Industry Development Association). Therefore we discussed in the meeting many times whether or not we will change the name of our organization in the connection of it. Then our former

Executive Committees and current Executive Committees had concluded that we will remain the name of “ABK” within the name of our organization to keep good relation and a historical memory as long as possible. We would like to keep our good relation and long history forever.

Lastly, I would like to say congratulations and thank you for your warm welcome.

Thank you very much.

祝 辞

ウン・キム・チャイ様 (マレーシア)

マレーシア ABK 同窓生募金発起人会代表

マレーシアのウン・キム・チャイと申します。よろしくお願いたします。私は1977年に日本に来まして、国際学友会で日本語を学び、1978年に東京工業大学に入学しました。その後82年に卒業してソニー本社に入社し、1999年まで日本にいました。そして、今は、マレーシアで日本のジャノメという会社の産業用ロボットの代理店で、ロボットを日本の企業などに売り込んでいます。

まず、学校法人 ABK 学館日本語学校の設立について、無事に完成し ABK の関係の皆様には、本当におめでとうございます。今から33年前の話になりますが、1979年の末から1980年頃、私はマレーシア留日学生会の福祉セクションの理事になって、マレーシアから日本に留学したい学生たちへ留学情報を提供したり、保証人の紹介をしたり、



学生が日本に来てからのいろんなお世話をするという活動をしてました。

ある日、一人のマレーシアの留学生在が日

本語学校に入るために保証人が必要だということ、ABKの留学生相談室に相談に行ったわけです。その時、萩田セキ子先生という方がいまして、留学生相談室の嘱託で、いろいろ留学生たちのお世話をしており、わたしたちにとって大変大切な人でした。その萩田先生に相談をしたのですが、保証人がいないと、特に私費留学生は日本に留学にも来れなかったんです。それで最初は、昨年亡くなられたABKの元理事長田井重治先生にまず私が紹介した一番最初のマレーシア人留学生の保証人になっていただき、やっと日本に来れたわけです。その後、私が覚えているのは当時留学生相談室担当職員の新石さん、もう亡くなられた方ですが、新石さんにも私が紹介したマレーシア人留学生の保証人になっていただきました。

その後マレーシアのマハティール首相によるルックイースト政策がはじまったこともありまして、日本に留学を希望する人が急に増えたんですね。最初の数人はABKの職員とか、田井先生に保証人をお願いしていたのですが、急に数十人とか百人単位の人数が増えてしまい、職員一人が数十人の学生の身元保証人にはなれませんから、ABKが、財団法人として理事長名義で保証人になれるようお役所などに働きかけ、マレーシアからのたくさんの留学生の身元引受人になっていただくことができるようになりました。

そのほか、ABKでは当時補習クラスというのを開いてまして、これは1981年頃からだと思いますが、まだABKに日本語コー

スが出来た前のことです。留学生相談室によって運営されてた留学生のための補習クラスというのがありました。最初は東京大学の佐伯さんという学生（新星学寮生）や、今ここにいるベー・チョー・キムさんですね、川上剛さん（共に東京医科歯科大学生、ABK在館生）とか、留学生のために数学や物理や、英語など大学受験に必要な科目をボランティアで教えてくれてたんですね。私もそういう話を聞いて、その補習クラスの先生として数学と物理を教えさせていただきました。

その後、今この会場にいるチュア・ヤオ・ハンさん（東京大学生）が当時のマレーシア留学生会の会長になった時に、その時の理事たちが、例えばブアーさんや、ティーさん、モエイさんといった何人かの国費留学生も、私費留学生のために補習クラスで物理や数学、化学や英語など大学受験のためのいろいろな基礎科目を教えてくれました。そういうこともして、そこで積んだ経験を元にABK日本語コースという日本語学校がスムーズにスタートしたんだと思います。

そのように30年前の1983年にできたABK日本語コースが30年後に、ABK学館日本語学校に変身したと思うんですね。そういう歴史ですね、私たちマレーシアの留学生がABKと深い関わりができて、私たちは大変嬉しくまた光栄だと思っています。

今後、私たちはABK学館日本語学校の更なる発展にぜひ貢献したいと思います。これで、私の御挨拶とさせていただきます。

祝辞

ベー・チョー・キム様（マレーシア）元 ABK 在館生代表

マレーシアから参りましたベーです。昨日うまく台風を切り抜けて揺れながら、無事墜落せずに着陸できましたが、また夜中の1時に地震にも揺らされました。これは穂積先生からの何かの印だと思いますが(笑)、喜んでいるのか怒っているのか(笑)。

ABKに入寮した日を昨日のように思い出しますが、既に33年になります。ちょっとその時の生活の様子を写真でみなさんにお見せしたいと思います。

① 当時は、部屋のほとんどは AOTS（財団法人海外技術者研修協会）の海外技術研修生の宿泊に使っており、大学生の数は各国1名か2名で、二十何人かの学生が学生フロアで生活して共同生活をしていました。私が ABK に入ったのは1980年ですが、その後、日中の国交成立後、友好関係が出来て初めての中国からの留学生が来日し、ここに住むようになりました。その留学生から毎朝太極拳を教えてもらいました。

② ABK では毎年新年会をやっていて、今年もあとで「秋祭り」という同じようなお祭りがあるそうですが、私たちの時代は ABK のニューイヤー・パーティーでした。他にもよくパーティーをやって、みんなで酒を飲みながらわいわいやりました。最近はどうなっているかわかりませんが…。

③ ABK 花金会は我々が入ってから作られた会ですが、毎月の第三金曜日に入館生と職員達がいっしょに食事を作り、食べ、い



ろいろ留学生が直面している問題を話し合うというものです。それ以外にも、夜だいたい11時か12時頃に、勉強が終わったらみんな下の事務所に降りてきて、職員の邪魔をしてラーメン作り、こっそりとビールを飲んでみんなと話したのですが、どうも30年も過ぎて時代も変わって、最近は禁酒になっていて…、なんとなく自由に語り議論するといった穂積精神のようなものが薄れて行っているように思いますし、残念に思います。

④ 学生は、大学の先生や保証人、友達を呼んで行った新年会が一番大きな ABK の行事でしたが、地域の祭にもみんなで参加しました。職員とも花金会で世界の問題を

どうやって解決するかということで、何日も討論するんです。結局何もいい結論は出ないんですが、そういうようなことはよくやって、素晴らしい信頼関係を今日まで持って保ってこれたわけですね。

ABKの職員達はみんな非常に素晴らしい頭を持っていて、本来は大きな会社の社長とか大学の学長をやらないといけない人材なんですが、留学生のために一生安い給料でみなさんががんばってきて、本当にありがたく思っています。

⑤ また、バイクで旅行した時には、田井重治元 ABK 理事長のお兄さんの家にホーム・ステイをさせていただきました。そういう思い出もあります。



私は、マレーシアのクアラルンプールで日本人学校の校医を二十数年やっているほか、日本の JICA (Japan International Cooperation Agency; 独立行政法人国際協力機構) や JOCB (Japanese Overseas Cooperation Volunteers; 青年海外協力隊)、日本企業の医療顧問をやっています。私のジャパン・メディカル・クリニックの患者はほとんど日本人ですが、今、カルテ番号が 95,000 人で、多くの日本人のお世話をしております。

私が入館した当時は穂積先生がまだご健

在でしたが、入館して間もなく穂積先生がご病気で亡くなられて、そしてまた AOTS が ABK から離れて行くと、急に宿泊する研修生の数が少なくなり、ABK は経済的な危機に直面したわけですね。そこで理事長が諮問委員会をつくり ABK の職員、関係者たち、『花金会』のメンバー等が委員になり、その将来をどうするかということを話し合いました。その結論、やはり日本に長く住む、または日本の文化をよく理解できて、言葉ができて、そして日本から

自分たちの国に帰った時に日本との掛け橋になれるような大学で学ぶ日本語学校生の養成が一番いいのではないか、ということで、その時に ABK 日本語学校を推進することに

なったわけですね。そしてその日本語学校に、自分の 2 人の妹たちも入れました。今、何回生になっているかわかりませんが、私の息子もここの日本語学校生として在学しています。まだ、6 か月しか経っていないので、まだあまり喋れないと思いますが。

その後 ABK の日本語コースは立派な学校になり年間 400 名もの学生が入るような日本語学校になったのですが、円高や東日本大震災、福島原発事故など色々な問題があって、学生の数が減ってきています。さらに日本語学校を学校法人にしなければ

校設立記念式典



皆さまをご存知のように、ABKは長い歴史を持っています。その中で、2010年にABK同窓生募金を開始し、たくさんのABK同窓生、関係者の皆様のご支援を得て、新しい学校が設立できたと聞いています。在館生代表として、心からお礼を申し上げます。

今回新しい学校できたことで、私たちが在館生も大変嬉しく思っています。これから、ともに勉強し、ともに暮らす仲間が増えます。新しい学校の新しい学生は昔の私たちのように、多少不安があるかもしれませんが、「ABKにいれば大丈夫」と私たちは後輩に伝えたいと思います。そして、ABKで自分の夢を育て、自分の才能を発揮し、将来自分のために、社会のために役に立つ人間になろうとこれから一緒に頑張りたい

です。

先に、先輩方からお話を伺いました。かつて、ABKでは毎年1月に新年会を開催し、在館生の保証人や指導教官、友人、それに、ABKを支援してくださる方々をABKにご招待し、在館生の手料理と、エンターテインメントでおもてなししていたとのこと。今回の式典の機会に、たくさんのOBの方々がABKに来てくださること、式典に合わせて、本日秋祭りを開催いたすことになりました。

式典終了後、お時間があれば、ぜひ会館をめぐって、アジア各国の料理やパフォーマンスを楽しんでください。そして、昔のABKを思い出していただきたいと思います。そして、後輩の私たちに、ぜひ昔話や豊富な人生経験を教えていただきたいと思っています。

最後になりましたが、本日OBの方々、ABK関係者の皆様方にお会いできたことを、とても光栄に思うとともに、もう一度お礼を申し上げます。そして、私達が期待に応えるため、また何より私達自身のためにABK会館や学校での生活を有意義なものにしていきたいと思っています。

大切な思い出の家、若者が翼を広げる場所、学生の夢を育てる学校、日本とアジア各国の関係を深める絆、すべてがこれまでのABKで育まれてきました。これからのABK学生にも目指して欲しいと思っています。

今後ともよろしくお願い申し上げます。ご静聴ありがとうございました。

日本語文学のバイリンガル性 (2)

郭 南燕

国際日本文化研究センター 准教授

3. 文化比較の視点

これらの作家は、日本文化を他の文化との比較の中で捉える視点を持っている。そのため、彼らの作品は多文化的な色合いが濃い。たとえば、ボヤンヒシグのエッセイ「時計の前に」では、「日本のどこへ行っても、時計がよく見られる。時計の前にいつも僕がいる。(略) モンゴル語で、『時間』と『時計』と『時代』と『季節』を『チャグ』というひとことで大雑把に表すことが多い。(略) 日本人の顔からも時計が見られる。モンゴル人の顔からは永遠はみられるが、瞬間はほとんど見られない。日本人の顔からは瞬間がキラキラと目につく。」と表現している。そして、彼は、「日本人の曖昧さ」について、「日本人同士の間にはいわゆる曖昧さは存在しえない。外国人も日本に長く住んでいると、ことばから表情まで、どこか日本風に染まっていく。僕もその一人かもしれない」と書いている。日本人のいわゆる〈独自性〉が、外国人にも理解され、共有されるし、決して神秘的なものではない、という彼の視点は、「日本人論」の作った壁を取り払っている。彼はまた、日本の

地震を通して、地球の動きに気づくようになった。「地球の深層も、常に、新陳代謝しているのだ。(略) 今は、一種のとんでもない快感さえ覚える。動かないとバランスがとれない。動きすぎるとバランスが崩れる。実に難しい世界。地球という乗り物が生きているということだけは確かだった」と書いている。

このように日本生活が作家の思考の領域を広げている例は多々見られる。神戸で阪神・淡路大震災を経験した毛丹青は、つぶさに日本人の言動を観察していた。「続々と建物から出てきた人の足取りは、とりたてて乱れておらず、終始平静で、しかしとても素速かった。(略) 車を運転しながら、ゆっくりした速度で信号の点滅しない十字路を通過しようとする。みな互いに整然と譲り合い、意思を伝える手振りだけが存在し、クラクションも言葉もない」と感心する。彼は、「日本に来て初めて、私は直感的、感性的な体験世界というものを本当に認識し、日本人を理解するのにどれほど重要かを知った。(略) 日本人との交際の中で、私は書物から飛び出し、より広い思考を持ち得た」と書いている。つまり、日本での生

活は、哲学研究者だった毛丹青の思考方式を変化させているのである。

そして、日本女性の和服姿に関心を惹かれた毛丹青は「石段を歩くその音は、短く歯切れよく、年越しに中国人がギョウザの餡を作る時の野菜を刻む音を連想させる」と感じ、楊天曦は「夕闇の中、下駄をつっかけた二人の女の白い素足は交互に前へ進み、カタカタとリズムカルな音が心地いい。裾の下に飼われている繊細な小動物がいたずらっぽく身体を出しては隠れ、戯れているかのように見えた」と描写している。二人は和服姿によって創造力を掻き立てられ、中国人の感受性を交えながら、比喩を持って鮮やかに表現している。

田原は、詩「日本の梅雨」をもって、二〇〇一年第一回「留学生文学賞」(旧ボヤン賞)を受賞している。一部分だけを引用する。

三

びしょ濡れにされるのを渴望する鳥々
梅の花びらに埋葬されるのを渴望する
鳥々
傘の下でときめきながら浪漫的な叫びを
あげるのである

……

六

梅干しは梅雨の内に干し上がることは殆どなく
梅雨も又梅干しが干し上がった後に明け
ることは滅多にない

梅干しの青春は一つの季節の内に殆ど失
われるのである

その皮の艶は生氣のない影となり
柔らかな壁の中へ倒れ込む
硬い種をがっちり包んでいる
……

この詩は、日本人の日常消費品の梅干しを想像の源としている。日本の俳句では、梅干しが夏の季語であるが、梅干しからの梅の花びらを連想することは中国文化の背景をもっているからであろう。無論、梅雨の時、日本の鳥々が梅の花びらに埋葬されることを望むことはないだろう。田原の詩には、時々このように日本人の季節感と自然観察と違う表現が現れ、読む者に眼を見張らせる。また、平安時代以降の日本人はむしろ桜の花びらに埋葬されるのを望むだろう。ただ、花に埋葬されることをこの詩に出したことは、『紅樓夢』の林黛玉が桃の花を葬るという情緒と無関係ではないだろう。

それから、梅干しの「紅い」色は、「鳥々のしょっぱい涙」と喩えられ、梅干しの「皮の艶は生氣のない影となり」、「柔らかな壁の中へ倒れ込む」という描写からは、むしろ、梅干しを見馴れていない新鮮な眼が感じられる。この詩は、声を出して朗読すれば、必ずしも読み易いものではない。田原の日本語詩は、日本語固有の音韻や形式にこだわらず、声での朗読を前提とせず、漢語と和語の意味合いと文化背景が縦横に交錯し、

眼で読むことを要求する。

楊逸は小説『ワンちゃん』の中で、日本語の表現に敏感な主人公を書いている。ワンちゃんは、八百屋経営の土村が、「野菜って面白いよ、人見知りもするけんね」、母親が「朝起きて真っ先に菜園に、野菜の様子を見に行った」ら、「野菜皆が喜びよって」と言ったのを聞いて、土村の優しさと繊細さに特別な好感を持つようになる。ワンちゃんは、日本語が「下手」だと設定されているながら、この擬人化の表現で心の琴線を震わせている。彼女が中国人の前夫と日本人の夫から愛情を得られていない淋しさがあると同時に、生まれ育った国でこのように野菜をいたわるような表現に出会わなかったこととも関係があるだろう。

楊天曦の小説『海辺通信』においては多言語と多文化の融合が見られる。主人公の「ぼく」は日本へ留学したばかりで、夏休みに海辺の民宿でアルバイトをする。民宿経営の夫妻に温かく受け入れられ、アルバイトをする日本人の長谷川と瀬良とも違和感なくつき合っている。「ぼく」は、民宿のおかみさんの身の上話を聞く時、「いかにも注意深く耳を傾ける表情」をして安心感を与えて話を引き出している。そのとき、「中国の表現で言えば、相手が言葉の箱を開いてくれたのだろう」という、中国語の表現を取り入れる。と同時におかみさんのスペイン系の顔立ちを描いて、「日本人」の出自の複雑さを暗示する。

シリル・ネザマフィの小説『サラム』で

は、女性通訳の「私」は、弁護士とともに、アフガン人の若い女性レイラの日本での難民申請を手伝い、レイラを収容する、監獄のように物々しい警備と検査が行われる入国管理局へ度々足を運ぶ。そして、高額に通訳料を受け取っている。レイラの難民申請が失敗し、強制送還と決定されたのを知った時、「この二年間、ボランティア精神以外のことを感じさせなかったこの人たちの曇った顔」を前にして、「私」は自己反省をする。

ただ一つ言えるのは、絶望と悲しみで詰まった、息さえしづらいほど空気が重いこの部屋には、ボランティアとかけ離れている人間、一人がいるということだ。彼女と会った一分一秒のためにお金をもらっていたその人は、今この瞬間彼女のことを心配していると言えるのだろうか。この瞬間の時給も後で請求するというのに。こんな私がレイラに告げられる言葉があるのだろうか。無意識のうちに頬がだんだん熱くなっていく。

語学力を持って換金する「私」と、無償で時間と智慧を提供するボランティアとの間に初めて心理的距離が縮み始めている。これはこの小説の中で最も感動的な場面である。イラン人はかつて、日本に出稼ぎして、日本文化に無関心な外国人労働者の代表と目されていたが、ネザマフィのこの小説によって、イラン人が日本文化を理解してい

るだけではなく、日本の文学にも新しい要素を提供していることが分かる。

4. 共有される日本文化

外国人とのコミュニケーションに不安を感じがちな多くの日本人は、外国人がどんなに日本語を融通無碍に操ることができても、相変わらず、相手の日本語力を信用しないことがよく見かけられる。それは、外国人がとうてい日本語と日本文化を理解することが不可能だという〈信念〉によるものだろう。これに苛立ちを感じる日本語作家が多いようである。

リービ英雄は、「ほとんど無意識的に、近代の日本人からはコトバをめぐる所有権の強いクレームを感じて、その所有権から自分が常に外されようとしているということも、最初に東京へ渡来してきた昭和四十二年から、四半世紀以上にわたって感じつづけてきた」と書いている。アーサー・ビナードは「日本在住が十何年にもなると、日常会話の範囲内のものはほぼ網羅できて、諺や四字熟語も、たいがいはどこかで出くわしている」のに、彼の流暢な日本語を聞いていても、日本の常識的な諺をまだ知らないだろうと決め込んで、「ジャパニーズのひとつやふたつを教えてやろうとする人が」必ず出てくる。その中で一番多いのは「一期一会」であり、

「あッ、またきたな」と神妙な顔をつ

くって、静かに待ち受け、そして「ええ、ぼくも好きですよ、甘くてネ、イチゴ大福なんかも大好き……」などと落とす。

ビナードは皮肉と笑いをもって、このような思い込みに斬りつけている。しかし、真顔になって怒る人もいる。

デビッド・ゾペティの『いちげんさん』の主人公「僕」が一番不愉快に思っているのは、日本人が彼の日本語力を信用しないことである。プラットホームで日本語の新聞か小説を読んでいるのに、その高度な日本語力を信じ切れず、「オー・ユー・ジャパニーズ・カンジ・オッケー？」と得意げに話しかけてくる人がいるし、注文を日本語で言っても、カウンターの若い女性はマニュアル通りの英語で「ツー・テーク・アウト、オアー・ツー・イート・ヒアー？」と聞き返してくる。また、トンカツと一緒に運ばれてきたのは割り箸ではなく、フォークとスプーンだったりする。京都に住む「僕」は、京都の美しい「土塀、竹の柵、簾、格子」がだんだんと「人々の心の壁の象徴に見えて」くる。そのため、カラオケバーで、ある「太ったおじさん」が「日本の心はこれからどこへ行くんやろうな」と意味ありげに言い残した時、「僕」は「どこへも行かへんって、阿呆たれ」と怒鳴り返した。

このような「僕」を受け入れてくれたのは、盲目の若い女性京子とやくざの「貝塚組」だけである。京子は「国籍や人種を超えて、僕と人間として接してくれ」るし、「組」

の人は「僕らを日本人として扱っていたわけではない。しかし同時に、変な外人扱いもしない。「僕」が大学で「国文学をやっています。特に近現代文学です」と自己紹介をした時、「貝塚組」の親分は、「国文学ちゅうのは日本文学のことかい?」と聞きかえした。その固有名詞のもつ「国」の権威に鈍感なのか、それとも「僕」の出身「国」を連想したのか。「国文学」と似ている言葉に「邦訳」というのがある。いずれも日本の内側から見ることのニュアンスが強い。国家権威や社会秩序に無頓着な親分の問い返しは、外国人が「国文学」という言葉を使う不合理性を暴露してします。

結び

国籍、肌色、母語の違いにかかわらず、日本国内外で日本語と日本文化を理解している外国人は、本書の「序」で触れたように二〇〇万人を下らないだろう。「外国に生まれながら、日本に来て、実質的に新しい日本人として生きている、少なくともボーダーを越えてくる前の自分とは違った、日本文化共有者となった者は少なからずいる」とリービが指摘した通りである。外国人が日本人とともに日本文化を共有していることが今日の現実である。したがって、日本語と日本文化は外国人に理解されることは不可能だという思い込みは時代遅れである。だが、その思い込みはまだ根強い。

それを覆す力をもつものはまさに、多言

語と多文化の要素を盛り込んでいる「バイリンガルな日本語文学」である。外国からの書き手によって、日本語が応用、発展され、日本文化は理解、変容されて、日本の文学が相対化、多様化されていくのである。これからの「日本語文学」は、書き手が外国人かどうかによって決められるのではなく、作品の中にどれほどの言語的、文化的多義性があるかをもって測られるべきだろうと思う。

歌人沢木あや子の歌はこのような相対化が光り、印象に残る。例えば、

何となく少しはわかる日本人の丸い
発音中国人の四角の発音
(『心の花』2002.12)

この短歌は、日本語と中国語の音声上の特徴を、視覚的イメージに変換している。日中両言語を解する読者なら、はっとさせられるだろう。言語の比較によって培われた自由で柔軟な精神がこの斬新な表現を生み出したのであろう。

「日本語文学」はバイリンガル性が濃いほど、日本語の異質性と文学の多義性を与えて、日本人と外国人を含む日本語話者の視野を拡げ、思考を深め、日本語と日本の文学の更なる発展につながっていくだろう。何よりも大切なのは、このような文学作品を享受することによって、読者がバイリンガルな精神構造を築き上げることであろう。

(終)

ここにご紹介した評論：郭南燕著「日本語文学のバイリンガル性」は、『バイリンガルな日本語文学—多言語多文化のあいだ』（郭南燕編著・三元社）に所収のものです。著者及び出版社の許可を得て本誌に再録します。なお、本文には53か所に註が付されていますが、本誌は学術専門誌ではないため省略させていただきました。2回に亘って連載いたします。本書は、国際日本文化研究センターが催した二回のシンポジウム「日本語で書く：文学創作の喜びと苦しみ」（2010年1月29日）、「日本語で書く：非母語文学の成立」（2012年1月27～28日）における研究発表と、日本で

活躍する日本語を母語としない作家七人、田原、シリン・ネザマフィ、ボヤンヒシグ、楊天曦、リービ英雄、アーサー・ビナード、温又柔諸氏の発言をまとめたものです。編著者の郭南燕さんは、中国上海出身の元A B K在館留学生です。高校時代に堀辰雄を愛読したという日本文学通。

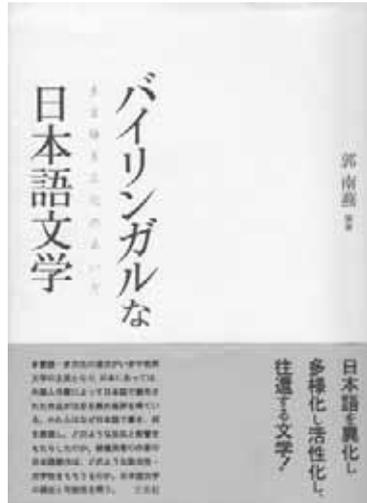
著者略歴：1962年中国生まれ。1996年博士（人文科学、お茶の水女子大学）、博士論文テーマ：「志賀文学の源流」。オタゴ大学上級講師・准教授を経て、2008現職。専門：日本近代文学。

主な著書：Japan's Wartime Medical Atrocities: Comparative inquiries in science, history, and ethics, Routledge, 2010. (共編著)

Tsugaru: Regional Identity on Japan's Northern Periphery, University of Otago Press, 2005 (共著) .

『小笠原諸島—アジア太平洋から見た環境文化』（共編著）平凡社、2005年

(文責 小木曾)



編著：郭南燕 発行：三元社
本体 4,000 円+税

日中青年交流センタープロジェクト 第3回年次総会に出席して

財団法人アジア学生文化協会 理事長 小木曾友



2013年10月14日、15日の2日間、北京大学において、日中青年交流センタープロジェクト第3回年次総会（以下、北京会議）が開かれた。この会議には、中国の北京、清華、復旦、上海交通、浙江の5大学から、また日本の4大学などから学長、副学長レベルの代表が出席した。現在この5大学では、中国人学生が日本人留学生と共同で暮らす学生寮（中日青年交流センター）をつくる計画が進んでいるが、これは、日

本に留学した経験のある香港の実業家、曹其鏞（Ronald Chao Kee Young）氏が各大学に2千萬元ずつ計1億元（約16億円）の建設費用を寄付したことで始ったものである。（なお、この件に関しては、朝日朝刊2013.10.22及び読売朝刊2013.10.24の2紙が報じているが、以下の報告は両紙も参考にした。）

曹氏は1957年来日し、62年までアジ

ア各地の留学生の共同生活寮であるアジア文化会館（ABK、東京都文京区）に住み、東大で機械工学を学んだ。米国留学を経て65年に香港へ帰り、家業の紡績業を継いだ。日本との取引でトラブルに遭った際、解決に力を尽くしてくれたのが、穂積五一氏（アジア学生文化協会理事長一当時）はじめ、留学時代に付き合いのあった日本人であった。「学生時代の出会いは一生の宝になる」と実感したという。尖閣諸島沖の漁船衝突事件をきっかけに日中関

係が悪化した2010年、自らの体験を生かしたいと前記5大学に学生寮の設置を提案した。

昨年（2012年）9月に開所した北京大學の中日青年交流センターは、国内世論を懸念した大学側が開所式を取りやめたが、それでも中日双方から学生20人ずつが入り、2年目の今年は30人の枠に300人の中国人学生が応募した。北京市中心部から車で約1時間、広大なキャンパスの一角にあるこのセンターは、マンションのような造り

日本側大学関係者出席リスト

所 属	タイトル	氏 名
東京大学	理事	江川 雅子
"	渉外本部長	清水 秀久
"	渉外本部ディレクター	吉田 房代
"	国際本部国際部長	井上 睦子
"	国際本部国際センター副センター長・教授	園田 茂人
"	国際本部北京代表所所長	宮内 雄史
京都大学	理事・副学長	小寺 秀俊
"	研究国際部留学生課教育支援掛長	上村 健
"	国際交流推進機構企画連携部門主任専門業務職員	韓 立友
九州大学	理事・事務局長	芝田 政之
"	国際部長	大村 浩志
"	国際部留学生課課員	横松 良介
早稲田大学	総長	鎌田 薫
"	常任理事・副総長	内田 勝一
"	総長室長	花尾 能成
"	国際部東アジア部門長	江 正殷
"	北京事務所長	向 虎
公益財団法人アジア学生文化協会	理事長	小木曾 友
一般財団法人海外投融資情報財団	事業企画部兼総務部次長	行天 健二
公益財団法人国際通貨研究所	専務理事	渡辺 喜宏
"	総務部副部長	植田 賢司

の6階建てで、寝室二つと共有スペース、トイレ、シャワーを備えた各部屋に、中国人学生と日本人留学生が2人1組で暮らす。（最近日本でも普及してきた所謂「シェアハウス方式」である）

中国の大学では、中国人学生と留学生は別々の寮に分けられるのが一般的で、生活習慣の違いによるトラブルや、「中国人学生への過度な思想的影響を」（大学当局者）を防ぐ狙いがあるようだが、留学生からは「中国人と知り合う機会が少ない」と不評



(左から) 鎌田早大総長、小木曾、
荻野正明氏、内田早大副総長



曹さんと京大・小寺副学長

だ。(『読売新聞』2013.10.24より)

北京会議に出席した筆者は、10月14日、北京大学の中日青年交流センターを見学したが、出迎えてくれた中日両国の寮生たちの明るい笑顔が、寮での生活が楽しくうまくいっていることを示しているとの印象を受けた。

曹其鏞氏の呼びかけに応じて、日本側にも大学に日本人学生と留学生が共同生活をする学生寮を設置する動きが広まっており、早稲田大学、東京大学(計画)です

でに建設が始まっている。両大学の寮もシェアハウス方式を採用するが、1ユニット日本人学生2人、外国人留学生2人の4人1組とし、留学生は日本側の実情を反映して、中国だけでなく、アジアや欧米も含めることになるようである。その他、京都大学、九州大学、一橋大学などにおいて、曹氏の呼びかけに応じて、新たな寮の建設には加わらないが既設の学生寮を活用して、日中の学生が共同生活をする新しいプログラムの実施を計画しており、北京会議



センターの中日学生から記念品を受ける
曹さんご夫妻



センターの個室



北京大学中日青年交流センター



明るい笑顔の中日寮生

には、東大、早大、京大、九大などから代表が出席した。

また、曹其鏞氏は、「中日青年交流センター」とは別に、中日はじめアジア各国間の留学生交流を促進するための奨学基金の設立を計画しており、すでに香港において、曹ファミリーのチャリティ・ファンド「百賢教育基金 Bai Xian Education Foundation」からの百億円の寄付を当初の基金とする The Asia Institute 設置の準備

が進んでいるが、詳しい紹介は次号にゆずりたい。

「中国のリーダーにはこの5大学出身者が多い。若いうちに信頼関係を築くことが国どうしの人脈になる。人脈があれば対立も克服できる。日中の若者の理解が深まって、我々が失うものは何一つない。日中関係の未来を若者に託したい」(朝日、読売)という曹其鏞氏の言葉を、私たちは深く噛みしめる必要がある。

Message

Distinguished Guests, Ladies and Gentlemen,

First of all, I would like to thank you again for your support in the Sino-Japanese Youth Center ("SJYC" or "Center") Project. Throughout the meetings and discussions over these past two days, we have attained a better understanding of the progress of our work, exchanged ideas and experience and shared respective visions on improving Sino-Japanese relations, all of which further solidify the foundation of the project and provide the means for long term sustainability of SJYCs.

While recent tensions in Sino-Japanese relations have hampered most bilateral economic, social and cultural exchange efforts, through the privilege working with the various universities, I have genuinely felt your passion in fostering social and cultural exchange among Chinese and Japanese youth. As such, I am encouraged and optimistic about the future development of Sino- Japanese relations.

2013 marks the 35th anniversary of the signing of the "Treaty of Peace and Friendship between Japan and the People' s Republic of China" . While visiting Japan, Chairman Deng Xiaoping stressed that "the future generations of Chinese and Japanese should be friends forever and ever" . Emperor Hirohito also expressed, "Our two countries entering into this treaty is a positive milestone towards long-term peace and friendship" . It was clearly stated in the Treaty that China and Japan should develop economic and cultural ties, and promote communication and exchange among their people. It is evident to us today, 35 years later, that the development of such ties and exchanges is the most effective channel in improving relations between the two countries, and this is precisely the objective towards which we are working today.

Although China and Japan are the two biggest economies in Asia, we cannot place our entire focus on Sino-Japanese relations and ignore our other neighbours in a rapidly developing Asia. I believe most have paid close attention to the recent Asia-Pacific Economic Co-operation ("APEC") Summit held in Bali, Indonesia. Under the current climate of arising Asia in the global geopolitical arena, not only must we continue our efforts in the bolstering Sino-Japanese relations, but we should also make use of our established groundwork and broaden our focus to cover Asia. As such, I have made a suggestion to rename the SJYC Project to the "Asian Youth Center" ("AYC") Project with the hope of providing a platform for students from different Asian countries to build cross cultural interest and knowledge.

I would also like to use this opportunity to announce the establishment of the "Bai Xian Education Foundation" ("Bai Xian") and the "Asian Future Leaders Scholarship Program" ("AFLSP"). Bai Xian is established to support the promotion of the AFLSP, and is a natural extension of the philosophy and efforts behind AYC. With the rapid growth and developments of Asian countries comes the need for visionary leaders in every aspect of society. It is, therefore, my hope and belief that the AFLSP can provide a platform where a new generation may be nurtured. Equipped with the solid foundation of a broader and deeper understanding of pan-Asian culture, these young scholars, who may play important leadership roles in government and non-government circles in the future, will be well-prepared to face the many challenges of globalization with their innovative and bold thoughts and ideas.

Lat but not least, let me express my sincere gratitude to all the Universities and honored guests for their continuous support for my vision in developing the next generation of Asian Leaders. I hope that our efforts can succeed in nurturing prominent future Asian leaders, and contribute to the thriving regional growth, development, friendship and mutual-understanding among the people of Asia.

Thank you!

October 15, 2013

Ronald Chao Kee Young

ご挨拶

ご臨席のご来賓の皆様

まず最初に、中日青年交流センターのプロジェクトをご支援下さっている皆さまに感謝申し上げます。この二日間の会議と議論を通じて私たちは、このプロジェクトの進捗状況を把握し、皆さま方のお考えや経験を交換し、中日関係の改善のためのそれぞれのヴィジョンを共有できたのではないのでしょうか。それによりこのプロジェクトの基盤が更にしっかりと固まり、中日青年交流センターの長期的継続のための方法も提供されたのではないのでしょうか。中日間における最近の緊張関係は、両国間の経済、社会及び文化の交流の努力のほとんどを阻害しております。とは言え、様々な大学で独自に進められている事業を通じて、中日両国の青年に対する社会・文化交流事業への皆様の熱情を心感じております。それゆえ、私は、中日関係の将来展望について意を強くし楽観的に考えることができるのです。

2013年は、日本と中華人民共和国の間に「日中平和友好条約」が締結された35周年に当たります。鄧小平主席は、日本訪問の折、『中国と日本の次世代は永久に友人であるべきです』と述べました。また、日本の昭和天皇も『この条約は、両国にとって、長期の平和と友好に向かうための明確なマイルストーンである』と述べています。中国と日本は、この条約によって経済的、文化的な絆を強め、また、国民同士の意思の疎通と交流を促進すべきであると明確に謳われています。そのような絆と交流の発展が、二国間の関係を改善する最も効果的なチャンネルであることは、今日、35年後の私たちにとって明らかです。そしてこれこそが、まさに私たちが現在実現に努力している目的そのものなのです。

中日両国は、アジアにおける二つの経済大国ですが、私たちは、中日関係だけに焦点をあて急速に発展するアジアの隣国を無視することはできません。ほとんどの国々が、最近インドネシアのバリで開かれたアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会議を注視していると、私は信じています。グローバルな地政学的場裡において台頭するアジアの現状で、中日関係を支える努力

を続けるだけでなく、私たちはまた、すでに築かれている土台を活用して、アジア全体に視野をひろげなければなりません。そのために、私は、異文化交流の関心呼び起こし知識を深めるために、アジアの異なる国々の学生たちにプラットフォーム（活動舞台）を提供したいと考え、中日青年交流センタープロジェクト（SJYC）をアジア青年交流センター（AYC）プロジェクトと新たに命名することをここに提案いたします。

私は、この機会を利用して、「百賢教育基金」と「アジア未来リーダー奨学金プログラム」の創設をここにお知らせしたいと存じます。「百賢教育基金」は、「アジア未来リーダー奨学金プログラム」の推進を支援するために設立いたしました。これは、アジア青年交流センター（AYC）の背後にある哲学と努力の当然の成り行きです。アジアの国々の急速な成長と発展とともに、社会の各方面においてヴィジョン（先見の明）を持つリーダーが必要とされています。それゆえ、私は、「アジア未来リーダー奨学金プログラム」が新しい世代を育てるためのプラットフォーム（場）を提供できるという希望と信念をもっています。アジア全般にわたる文化をより広く、より深く理解するための確固たる基盤の上で、これらの若い奨学生たちは、必ずや将来、政府や民間の機関において、重要な指導的役割を果せるようになるであろうし、革新的で大胆な思考とアイデアをもって、国際化のなかでの多くの困難な課題に立ち向かう準備を調えることができるものと考えます。

最後に大事なことを一つ言い残しましたが、次世代のアジアのリーダーを育てるという私のヴィジョンの実現を、継続的にご支援して下さいます。そして、私たちの努力が、将来のアジアの傑出したリーダーを育てることに成功することを願い、繁栄する地域の成長と、アジアの人々の発展と友好と相互理解に貢献することを切に望んでいます。

ご静聴ありがとうございました。

2013年10月15日

曹 其 鏞

泰日工業大学 (TNI) 奮闘記

② 恐るべし、オタクの力!

峯田真由美

日本語を学習しようとする学生は、マンガやアニメなどのポップカルチャーが好きとか、日系企業で仕事をしたいなどと様々な動機がある。泰日工業大学(TNI)の学生も同じである。

では、まず最初に TNI における日本語教育の概要を簡単に説明しよう。TNIには日本語に関する専攻はないが、1、2年生の二年間は、「日本語」が全学生の必修科目になっており、3、4年生では選択科目として履修できるようになっている。そのため、日本語教師は常勤で31名在籍しており、ほぼ半数が日本人教師である。

必修科目の「日本語」だが、二つのセクションに分かれている。一つは、BJと言って経営学部日本語・経営管理学コースの学生のための授業である。もう一つは、JPNと言ってBJの学生以外の全ての学生のための授業である。この二つのセクションでは、教師も分かれているし、テキストや教材、進度も異なる。学生は中・高校での既習者もいるが、ゼロスタートの学生も半分ぐらいいる。そして、日

本のマンガやアニメ好きのオタク学生も多い。

マンガ、アニメ好きな学生ならではのエピソードの一つを紹介しよう。当時、Aさんは1年生でN4ぐらいのレベルだった。タイの多くの学生は漢字に対して苦手意識を持っているが、Aさんは漢字に興味を持っていた。時々、マンガの本を持ってきて質問することもあった。ある時、Aさんは「先生の名前の『まゆみ』は魔法の『魔』に、『弓』ですか」と文字を書きながら話しかけてきた。私は「『魔法の弓』ですか?それもいいね!でも、私の名前は『真由美』です」と言って文字を書くと、Aさんはちょっと残念な様子だった。「魔法とか弓って言葉をよく知っていたね」というと、ニッコリ笑って「マンガで覚えました」と。確かに、マンガやアニメでは「魔法、魔法、悪魔」はよく出てくる言葉である。さすがマンガ好きと思ったと同時に、授業では厳しいと言われている私を魔法に例えたのだろうかとも思ったりして、後で複雑な気分になったことを覚えている。



◀日本短期留学の際、東京の専門学校で漫画を学ぶTNIの学生たち



▼現役の人気漫画家である講師が驚くほどの腕前



先日、私が昼食を取っていると、Aさんが「先生、カラオケ好きですか」と話しかけてきた。「好きですよ。でも、タイ語の歌はわかりません」と答えると、「大丈夫です。日本語のカラオケです。今度みんなで一緒に行きませんか？ Bさんは『北酒場』を歌います」と言

うではないか。思わず、「シブい！」と唸ってしまった。J-POPを歌う学生はいるが、30年前の演歌を歌う学生には今まで会ったことがなかった。Aさんの友達もやっぱりオタクだったのだ。恐るべし、オタクの力。この学生たちは今はもう4年生である。

峯田真由美 (みねたまゆみ)

泰日工業大学(TNI)教養学部BJ担当。専任講師。2006年からタイ・バンコクで日本語教師をスタート。当初3年間は国立の職業専門学校及び大学で専任講師をしていたが、2009年より現職。



じょうほう イベント情報

「^{ふゆ}冬のつどい in ^{ほっかいどう}北海道 ^{だい}第11回 ^{かい}国際交流^{こくさいこうりゅう}冬のつどい」^{さんかしゃぼしゅう}参加者募集

内容: ^{ない}札幌^{さっぽろゆき}雪まつり、^{しらおい}白老^{みんぞくはくぶつかんけんがく}アイヌ民族博物館見学、^{たいけん}スキーまたはそり体験、^つわかさぎ釣り体験、^{じもとだいがくせい}地元大学生とのアイスブレーキング・^{はこだてさんさく}函館散策・^{こうりゅうかい}交流会、^{ゆきたいけん}雪体験 (かまくら作り・^{つく}氷キャンダル作り) 他

宿 泊: ホテル、研修施設、ホームステイ
日 時: 2月11日～2月16日 (5泊6日)
場 所: 札幌～函館
定 員: 70名
参加費: フリープラン 49,000円 羽田プラン 78,000円

※ 詳細は WEB サイトにてご確認ください <http://www.hif.or.jp>

主 催: 一般財団法人 北海道国際交流センター TEL: 0138-22-0770 E-mail: tudoi@hif.or.jp

MEMBERS

〈会費とご寄付の報告〉

2013年8月

特別会員

(1口)
 今西 淳子 文京区
 RONALD CHAO KEE YONG 香港
 立命館アジア太平洋大学 別府市
 (株) シーボン 港区
 (株) Info Deliver 港区

賛助会員

(1口)
 (株) エレクトロデザイン 中央区

正会員

(1口)
 大和 正國 鶴ヶ島市
 竹田 繁 南陽市
 豊島 由久 所沢市
 堀内 智代子 国分寺市
 飯沼 信彦 揖斐郡

ご寄付

深澤 のぞみ 金沢市

2013年9月

特別会員

(5口)
 (株) スリーエーネットワーク 千代田区

賛助員

(1口)
 亜細亜大学 武蔵野市

正会員

(1口)
 鶴田 純一/由美 千葉市
 寺尾 方孝/三枝子 国分寺市
 代田 泰彦/ますよ 所沢市
 小野里 光博 文京区
 奥山 節子 西村山郡
 稲澤 宏一 新宿区

ご寄付

栗原 静子 気仙沼市
 鶴田 純一/由美 千葉市
 新谷 美紀子/美也子 市川市
 小山内 美江子 横浜市

皆様の御支援に感謝申し上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設立：1957年(昭和32年)9月18日
故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◆主な事業◆

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営(進学希望者向けの日本語を中心とする教育)
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◆会費(年額)◆

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円(学生2千円)でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。



2013年11月、六文会が文集「田井さんの思い出」(B5版48P)を発刊しました。非売品ですが、¥500でお分けいたします。ご希望の方は下記までご連絡ください。

☎ 03-3946-4121

Fax 03-3946-7566

e-mail asca50com@abk.or.jp

(担当：布施)

後記

恒例となった10月のABK秋祭りは毎年台風の接近やら秋雨前線の影響やらで天候の心配が付きまとう。この度の寄付を募っての日本語学校校舎の完成と学校法人設立を祝う記念式典は、当然のことながら質素に行うべしと手作りに徹した。そこで、ABK秋祭りに合わせて10月26日に、全在館生、日本語校生の協力を得て行うことになった。案の定、今年最大級といわれる2つの大型台風(27号、28号)が式典の1週間前に発生し、まさに式典当日の26日に台風27号が関東地方を直撃とのニュースに接し、一時は開催は無理かもしれないとすら思った。しかし、式典参加のために海外から12名ほどの同窓生らが駆けつけてくれるということもあり、中止することはできない。在日留学生OBが、「私は、毎日台風がそれるよう伊勢神宮に向かって祈っていますよ。大丈夫ですよ。」と。また、関係者の多くの方の祈りにも近い気持ちを通じたのか式典当日台風は関東地方を直撃することなく、東京近郊の交通機関は止まることもなく予定通り開催の運びと相成りました。それでも、雨風が少し残る中たくさんの方々の関係者の方々にお集まりいただき、長引いた円高、東日本大震災、福島原発事故、アジア各国の発展等に伴い、アジアからの日本留学が減少傾向にあるなかで、新しいABK学園日本語学校の厳しい船出を前に、今後への皆様の期待をうけ、共にお祝いできましたことは何より嬉しいことでした。(F)

海外からの参加者：マレーシア(6名) Mr. Beh Chor Khim, Mr. Ng Kim Chai, Mr. Foo Siang Seng, Mr. Tang Kok Lian (滞在国Dubaiから来日)、Mr. Tan Chee Teong、Mr. Ng Chin Keong、タイ(4名) Mr. Supong Chayutsahakij, Mr. Boonsak Charoenkoop, Mr. Bandhit Rojarayanont, Mr. Suchai Pongpakpien、台湾(2名) 李易学ご夫妻。式典へのご参加、お礼申し上げます。(F)

アジアの友 2013年10-11月号

2013年11月10日発行(通刊第505号)

年間購読(送料共)3,000円(学生2,000円) 1部 500円(税込)

発行人 小木曾友
編集 アジアの友編集部
発行所 財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号 : 03-3946-4121 ファクシミリ : 03-3946-7599
振替口座 : 00150-0-56754 E-mail : tomo@abk.or.jp
ホームページ : (<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-4121 ☎+81-3-3946-7599

Email : tomo@abk.or.jp

Home Page : <http://www.abk.or.jp/>

「アジアの友」の購読会員(年3,000円・学生2,000)にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。



学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所在地 〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12
電話番号 +81-3-6328-3428 F A X +81-3-6328-3393
U R L <http://abk-college.com> E-mail college@abk.or.jp

2014年4月新規開校



ABK
COLLEGE

2013年4月に完成した新校舎
新築3階建校舎。最新の耐震設計です。

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校(英語名称:ABK COLLEGE)は1957年に設立された財団法人アジア学生文化協会が寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校します。当校には姉妹校のABK日本語コース(財団法人アジア学生文化協会)もあり各種協力を行います。



授業風景イメージ



寮の一例



ABK日本語コース

ABK COLLEGE

ABK COLLEGE (学校法人ABK学館 ABK学館日本語学校) 東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・就職・文化体験等)

4月 1年コース	860時間/1年	入学検定料	20,000円
		入学金	80,000円
		授業料(施設・教材費含む)	620,000円

姉妹校 ABK日本語コース (財団法人アジア学生文化協会) 文部科学省指定大学進学準備教育課程

4月 1年コース	1086時間/1年	入学検定料	20,000円
		入学金	80,000円
10月 1.5年コース	1586時間/1.5年	大学進学 日本語課程 入学金	95,000円
		授業料 (施設・教材費含む)	720,000円(1年) 1,080,000円(1.5年)

所在地: 〒113-8642 東京都文京区本駒込 2-12-13
電話: +81-3-3946-2171 F A X: +81-3-3946-7599

U R L: <http://abk.or.jp>
E-mail: nihongo@abk.or.jp



● 便利なロケーション
東京の中心部にありながら、
緑が多く静かな環境